

弁当屋 店長は大学生

千葉大の天川さん「ふれあいの場」へ奮闘

千葉大・西千葉キャンパス近くの住宅街に、大学が営む弁当屋がある。千葉大法経学部4年、天川祥爾さん(22)が店長の「ふれあいの場」(千葉市稲毛区轟町1丁目)。地域に支えられ、人々の輪を広げる「ふれあいの場」をめざし、奮闘している。

空き店舗14平方メートルを借り、今年2月に開店。野菜を多く使ったヘルシーメニューが特徴で、日替わり弁当は300円。カボチャサラダ、高野豆腐など総菜は100円。地元の弁当屋「菜の花マーケット」の協力で格安に抑え、配達に使

軒回る「お得意さん」は飛送。稲毛区役所、企業、病院、大学……。1日10〜15時、車配りに店へ。その日の弁当や総菜を並べ、電話で注文を受ける。午前10時、車で配



弁当を手にする天川祥爾さん(千葉市稲毛区)

地域の支えで格安に

び込みの営業で開拓した。午後2時に店を閉め、大学の授業へ。夜、店に戻ってパソコンにその日の売り上げを打ち込み、帰宅は午後10時を回る日もある。

群馬県桐生市の出身。大学進学を機に、西千葉で一人暮らしを始めた。大学2年の冬、友人に誘われ、JR西千葉駅前の商店街で学生と地元商店主が交流し、地域通貨で売り買いする「第3土曜市」の運営に携わった。地元商店街の人々との出会いを通じ、「この店に食べに行く」から『この店の人に会いに行く』に変わった。

長(30)から「君ならできる」と弁当屋の店長を打診された。就職活動を控えて迷いはあったが、「人と人のつながりを生かしたい」と決心した。

遠出の買物ができない近所の高齢者のために、体によさしいメニューを心がける。「近くにこんな店ができてよかった」と喜んでくれる常連客もできた。地元の小学生が描いた天川さんの似顔絵が店の壁いっぱいに張ってある。「下校する子にあいさつしていたら自然に仲良くなって」卒業論文のテーマは「地域に対する住民の責任」。この仕事で学んだ集大成にし、来春の卒業後も店長を続けるつもりだ。「まだ地域の中に完全に溶け込めてはいない。地域の人たちのために、この店を居心地のいい『おうち』にしたい」と張り切っている。

(上月英興)